
ミコト

小花京平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミコト

【Nコード】

N2797S

【作者名】

小花京平

【あらすじ】

私は変化を恐れ、日常を愛していた。しかし、ある日自分が同じ夢を延々と見続けていることに気が付いてしまった。目を覚ました私がいたのは、日常とは無縁の世界だった……。

日常に別れを（前書き）

この物語はフィクションであり、登場人物、団体名等は全て架空のものです。

日常に別れを

私は、ごく普通の会社員だった。

幼い頃から何の取り柄もなく、優柔不断で、すぐに謝るのが唯一の癖。恋人にはすぐに愛想をつかされるし、友人も少ない。上司にはよく叱られるし、母にはいつも心配をかけてばかりだった。自覚はしている。私はどうしようもない人間なのだ。

大学を卒業し、家を出てからもう3年の月日が流れていた。毎日が同じことの繰り返しで、私は自分が生ける屍ではないかと懸念し始めていた。朝は満員電車で揉まれ、上司や取引先に頭を下げ、帰りにコンビニエンスストアで買った弁当を一人で食べる。休みの日は半日程睡眠を取り、掃除洗濯をし、出前を頼む。そんな毎日を過ごしていた。

変化などない。寧ろ私は、それを求めてはいなかった。しかし、変化は突然私の目の前に現れた。

最初の変化は、母が倒れたことだった。仕事中に妹から電話があり、私はすぐに仕事を切り上げて病院へと駆けつけた。母は、胃癌だった。

「あんたも心配性だね。来なくたってよかったのに」

そう言つて母は笑っていたが、医者は、検査の結果次第では明日にでも手術をすと言っていた。恐らく、危険な状態なのだろう。3歳下の妹は私より先にそのことを聞かされていたが、いつもと変わらぬ様子だった。女は強いと思った。

父は他に女を作つて家を出て行ったきりだ。費用は私が出すことになった。幸い無趣味な私は貯金が溜まっていたが、今回で使い切りそうだった。

二つ目の変化は、会社が買収されるという噂が広まっていたこと

だった。上司たちに変わった様子がないので出任せではないかという話だったが、不安がった社員たちは、自分のミスを他人に押し付けるようになった。買収後の人員削減を恐れるあまり、冷静でいられなくなったのだ。会社の雰囲気はとても悪くなり、仕事もしにくくなった。母が倒れたことによる心労に加え、疲労は溜まるばかりだった。

その愚痴を聞いてもらおうと、小学校からの付き合いである河村を休日呼び出した。河村は私の話を最後まで聞いてくれ、労いの言葉もかけてくれたが、最後に突然何食わぬ顔で、

「実は俺は同性愛者で、お前のことがずっと好きだった」

などと言った。訳がわからず困惑している私とは裏腹に、河村は冷静に「返事は仕事やお袋さんのことが落ち着いてからでいいから」と言っ、伝票を持って店を出て行った。疲労は溜まるばかりだった。

私はもう、自分がどうしたら良いのかわからなくなった。今までずっと同じことの繰り返しだったのに、どうしてこんなことになってしまったのだろう。考えれば考えるほど頭が痛くなる。

もう考えるのはやめてしまおう。そうだ。今日はもう寝てしまつて、明日からまた頑張ればいいさ。そう思いながら、私は自宅に帰るなり眠りに就いた。

朝起きて満員電車で揺られ、会社に着く。すると昨日とは違って、

いつも通りに皆仕事をしていた。いったいどうしたのだろう。私は内心疑問に思いつつ、いつものように仕事をすることにした。すると突然、携帯電話が鳴った。妹からだ。母の容態が急変したのではないかと心配になり、私は慌てて電話に出た。

「もしもし」

「お兄ちゃん、大変なの！お母さんが、急に……」

「どうしたんだ、とりあえず落ち着け。ナースコールは押したか？」

「ナースコール？何言ってるの？お兄ちゃんこそ落ち着いて聞いて！さっきお母さんが急に倒れたの！今救急車呼んだから、病院に着いたらまた連絡する！」

「は？おい、由香……」

突然通話が切れ、私は困惑する。母はもう病院にいるはずなのに、妹は何故あんなことを言ったのだろうか。何故か妙な感覚がした。そつえば、今日の仕事はこの間終わらせたものばかりだ。私はとりあえず疑問を捨て置き、仕事を切り上げることにした。辿り着いた病院で、母は笑っていた。

「あんたも心配性だね。来なくたってよかったのに」

私はその一言に、嫌な予感がした。そんな馬鹿な。ありえない。しかしその後、あの日のように医者に母の容態を説明された。内容は、全く同じだった。後日会社に行けば、買収の噂で社内の雰囲気は最悪だった。まさかと思いつつも河村を呼び出せば、案の定あの台詞を言われた。

そうか、これは夢だ。もう一度眠れば、きっと覚める。

私は自宅に帰るなり眠りに就いた。

朝起きて、満員電車で揺られ、会社に着く。するとまた皆、いつも通りに仕事をしていた。電話がかかる。妹からだ。私はいてもたってもいられなくなって、会社を飛び出した。

いったいどうなっているんだ。私は頭がおかしくなってしまったのか？それとも、これも夢なのか。

妹の電話に出なかったことが心配になり、私は携帯電話の画面を見た。その瞬間、青ざめた。日付が変わっていないのだ。恐ろしい。なんということだろう。

しかしそこで、私は気付いてしまった。私はこの数日を、いったい何度過ごしていたのかわからない。そういえば、もっと昔から繰り返されていたような……そんな気さえした。こうやって気付いたのも何度目なのだろうか。

これは日常を望み、変化を怖れる私への罰なのだろうか。まさかこれからずっと、この数日が続くのか？気が狂いそうだ。

「神か仏か、誰でもいい……もう許してくれ。私は変化を受け入れる。だから……この夢から覚ましてくれ……」

私は祈った。この悪夢から覚めるために、必死に祈った。それが、悪夢の始まりとも知らずに。

せめて夢の中で

心地よいまどろみの中、私は自分が水の中で揺られていることに気付いた。水中だというのに、呼吸ができる。いや、もしかしたらこれは水ではなく実は羊水で、私は母のお腹の中にいるのではないだろうか。ならばこの心地よさも納得できる。

水に揺られ、髪が頬を撫でる。髪？私の髪はそこまで長くなかったはずだが。それにもし私が母のお腹の中にいるならば、髪が生えているはずもない。これは胎児のときの夢ではないのか？

私はそつと瞼を開いた。水面がきらきらと光を受けて輝いている。光の筋が何本も差し込み、水中では神秘的な光景が見られた。私の前をゆらゆらと揺れている金糸に手を伸ばす。それは私の頭と繋がっていた。

髪？これは私の髪なのか？金？何だこの長さは。違う、これが私の髪なわけではない。

髪に触れる私の手は透き通るように白く、そして一回りほど小さい。私の記憶にある自分の手は、もつと骨ばっていて、血管が浮き出していたはず。いったいどういうことだ？

私は困惑し、とにかく水中から出ることにした。体を起こし、両足を交互に動かして水面へと浮上していく。頭から飛び出すと、眩いほどの光が私を照らしていた。

「ぷはっ」

口を開き、息を吐く。ゆっくりと瞼を開くと、そこには見たことのないような景色が広がっていた。

一言で表すならば、森。ただ、普通の森ではなかった。雲を突き抜けるのではないかというほどに巨大な大樹がそびえ立ち、その周

りを囲うように木々が生い茂っている。私が今入っている泉は、その大樹の根元にあった。巨大な根が一本だけ、泉の中へ足を入れるかのように入っている。

私は泳ぎ、泉から這い上がった。長い髪が水を吸い、重くなっている。そして漸く、私は自分が一糸纏わぬ姿であることに気がついた。何か着るものはないだろうかと辺りを見回すが、こんな広大な森の中にそんなものがあるとも思えない。私はとりあえず髪を絞り、水気を払った。

「ミコト」

不意に誰かの声がして、私は振り向いた。しかし、誰もいない。怪訝な顔をしつつ辺りを見回していると、突然大樹から何枚もの葉が落ちてきて、それが人の形になっていく。私は言葉を失い、目を見開いていた。

「とうとう目覚めてしまったのですね」

人の形をした葉は、俯く。顔がないので表情は読み取れないが、その声はどこか悲しげだった。

「は、葉っぱが、喋った……」

「わたくしは大樹。ニルエの大樹。貴方の力を受け、言の葉と知恵を授かったのです。話しやすいように、葉を人型に致しました」

そう言い、葉は私に少し頭を下げた。いったい何が起きているのかさっぱりわからない。私はただただ困惑していた。そんな私に対し、葉は話を続ける。

「貴方が生きていた世界は死にました。世界の寿命を、人は食い

尽くしてしまつたのです。貴方は崩壊の中たまたま生き残り、こちらの世界に放り出されてしまつた可哀想な人……。このまま目覚めず、自らの記憶の中で生き続けた方がどれほど幸せだったか……」

「ちよ、ちよっと待って下さい。もつとゆっくり話してくれないと、一遍に言われても……」

困惑する私の脳では、葉の言葉が受け入れきれずにいた。いや、もし頭で理解できていたとしても、こんな馬鹿げた話をいつたい誰が信じられるというのだろう。世界が死んだ？ たまたま生き残った？ 何が何だかさっぱりわからない。

「……そうですね。では、今の話で質問はございますか？」

葉は、私を落ち着かせるように優しくにそう言つた。それを聞き、私も冷静なつて今話をもう一度頭の中で流す。

「……ここは……いえ、私は……」

一番、聞きたいことを、私は問うた。

「もう、戻れないのですか……」

葉は、言葉を濁すことなく言い切つた。

「……ええ。二度と、戻ることはできません」

葉の姿が、歪んでいく。私の瞳から溢れた涙によつて。話を聞き、そうではないかとはわかつていた。これが夢ならばどんなによかつたことか。けれど、先ほど水中に漂つていたときも、濡れた髪を絞つたときも、この肌を感じる風も。全ての感覚が、私

にこれが夢ではないことを物語っていた。信じたくはない。けれど、信じなくては前には進めない。私はここで、嘘だと、これは夢なんだと、そう言えるほど、子供でもなかった。

私は涙を拭い、鼻を吸った。

「……そういえば、先ほどミコトと、呼んでいませんでしたか？」

「ええ。この世界で、貴方はミコトと呼ばれています。貴方は生命や物質に何らかの作用を促すことが出来る特別な存在。例えば、わたくしに言の葉と知恵を授けたように。ミコトとは、古くからこの世界で信仰されている空想の神の名です」

「神様、ですか……」

そんな大層な人間ではないのに。そう思ったのだが、この大樹がこうやって話せるのは私の力が原因なのだと言うのだから、それくらい大層な人間になってしまったのだらう。私はまだ俄かには信じ難かった。私にそんな力があるようには思えない。

「貴方に触れ、願えば、万病が治ります。物質を生物に変えられます。生物に強大な力を授けられます。故に、幾年か前、貴方をめぐって争いが起きました。その時多くの人が亡くなりました。再びそのようなことが起きぬよう、わたくしは沢山の子を作り、その中に貴方を隠すことにしたのです」

「子……この森のことですか？」

「そうです。貴方は何をしてても目覚めなかった。それなのに今日突然、目覚めてしまった……。貴方は永遠に死なぬ身体。貴方にとつて生きるということは苦でしかないのです……」

永遠に、死なぬ身体？

私は自分の両手を見た。言われてみれば、水中にいて呼吸をしていなくとも、何ともなかった。苦しさすら感じていなかった。それ

を思い出し、私はぞっとした。何もわからない世界に放り出され、そこで永遠に生き続けなければならないなんて。悪夢でしかない。

「……わたくしは言の葉と知恵を授けてくれた貴方に感謝しています。これから先も、わたくしやわたくしの子らは貴方を助けます。だからどうか悲しまないで……」

葉は私を抱きしめるかのように、私を包み込んだ。緑の香りが私の心を安らげる。

今日は疲れた。それを感じ取った葉は、地面にはらはらと散り、私の為に寢床となってくれた。

「ありがとう」

私はそう言い、寢床に横になって瞼を閉じた。せめて夢の中で、もう一度あの平凡な日常を味わいたい。そう思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2797s/>

ミコト

2011年10月8日23時25分発行